

第29回平和祈念コンサート 講演会

【足立陽子氏】ただいまご紹介にあずかりました、練馬区旭丘に64年住んでおります足立陽子と申します。

このように大勢の皆様の前で話すのは初めてで、大変緊張しております。

本日は、戦争体験ということでお話しさせていただきます。どうぞよろしくお願いたします。

私は、昭和10年（1935年）東京都の新宿区高田馬場で、5人兄弟の末っ子として生まれました。現在86歳でございます。

私には、姉1人、3人の兄がおりました。終戦の年には、私は10歳、小学校4年生でございました。

今日は、私が国民学校の時に行った学童集団疎開と、戦後のことをお話いたします。

今日お越しの皆さんの中で、疎開したことがある方は、どのくらいいらっしゃいますか。あまりいらっしゃらないようですね。「疎開」という言葉を知らない方は、それはあまりいらっしゃらないですね。ありがとうございました。

終戦の前の年、政府は、空襲による被害を少なくするため、都市に住む子供たちを農村部に疎開させました。これが学童疎開です。

学童疎開には、親戚や知り合いを頼る縁故疎開と、知り合いのない学童が学校や学年ごとに地方に行く集団疎開とがございました。私は、集団疎開と縁故疎開の両方を経験いたしました。

初めに、集団疎開のお話をいたしましょう。

私たち家族は、当時父が金物屋の商売をしており、現在の新宿区高田馬場に住

んでいました。だんだん戦争が激しくなると、企業整備令が出され、父は商売を辞めざるを得なくなりました。高田馬場は危ないということで、杉並の荻窪に引っ越しました。

ちょうどその頃、昭和19年9月から集団疎開が始まりました。国民学校の3年生の私と6年生の兄は、宮城県の涌谷というところに疎開したのです。

涌谷は宮城県の北の方にあり、石巻から内陸に入ったところにあります。同じ学校の3年生から6年生までの児童が涌谷に集団疎開しました。親元を離れ、大きな倉庫を改装したようなところで私たちは生活しました。午前中、自習したり遊んだり、午後からは、近くの小学校を借りて勉強した覚えがあります。

食べ物は、宮城県は米どころだったせいか、白いご飯で恵まれていました。たまに大福なども食べさせてもらいました。両親がおはぎやサツマイモを持って東京から面会に来た時は、すごく嬉しかったことを覚えています。

冬は、寒さで凍る田んぼで走ったり滑ったり遊んだりしていました。スケート靴を持っている6年生もいました。室内では、お手玉や、リリアンという編み物をしていました。

兄たち6年生は、皆優しく親切で、いじめなどありませんでした。先生方も寮母さんも、とても優しく、私は恵まれていました。

優しかった兄や6年生たちは、昭和20年3月初めに、卒業のため東京に帰ってしまい、兄がいなくなると、とても寂しかったことを覚えています。

昭和20年5月、2番目の兄がいる満州へ家族で行くからと、私は宮城から東京へ呼び戻されました。しかし、満州での戦局が厳しくなり、母が断固反対して、結果として満州には行きませんでした。

さて、集団疎開から戻ってきた私が東京にいたのでは、やはり危ないということで、今度は縁故疎開で、富山の魚津に預けられました。

なぜ魚津かと言いますと、姉の嫁ぎ先の大久保の家が焼け出され、家族で魚津に疎開していたからです。

姉の夫は兵隊に行っており、姉の義理の両親と妹と弟、そして私の姉と私、6人でお寺の本堂で生活していました。昭和20年6月から8月の終戦までの3か月、こうして魚津にいました。

ちょうどその頃、真夜中、魚津市から約20キロ離れた富山市が大空襲に遭い、私たちも山の上に逃げました。そこから、富山市全体が真っ赤に燃えているのを見て、怖くなって足がすくんでいました。

私は、魚津の国民学校に編入しましたが、富山の同級生たちの言葉に驚きました。女の子も自分のこと「俺」、トイレのことを「小便」と言っていました。授業中、「小便に行かせてください」というのが恥ずかしいけれど面白くて、トイレに行きたくもないのに、言った覚えがあります。

昭和20年8月15日正午、おじさんに、「子供たちは正座しなさい。」天皇のお言葉、玉音放送を聴きました。私は、意味がよくわかりませんでした。おじさんは泣きながら、「もう戦争は終わったんだよ。」と教えてくれました。

終戦とともに、私は東京の荻窪の親元へ帰りました。

姉たち家族も東京に戻りましたが、大久保の家は焼かれてしまったので帰る家がありません。大久保駅や淀橋青果市場が広いので、しばらくそこに寝泊まりしたそうです。

2番目の兄は、満州から命からがら、哀れな姿で引き揚げてきました。家族は、両親兄弟とも無事でしたが、いとは兵隊に行き、戦後はシベリアで抑留され、叔父はフィリピンで戦死、叔母は早稲田の大きな防空壕で焼け死んだのです。

ここで、戦後にお聞きした悲しい出来事を紹介します。

練馬区立豊玉東小学校の校長を退職された、嘉茂一男先生にお聞きした話です。

嘉茂先生は、戦時中、墨田区の本所小学校で集団疎開の引率係をされておりました。昭和20年3月1日、中学入学準備のため、36人の6年生学童を連れて東京に帰ってきました。

3月10日、嘉茂先生が残務整理のため、疎開先へ戻っていた時のことです。「東京江東区方面、大空襲、全滅。」と報道されました。東京の大空襲の日です。

東京に戻った36人の学童のうち、生き残った生徒はわずか5、6人。宿直の先生も亡くなられたそうです。悔やんでも悔やみきれない経験だったと思います。

こうして戦争は終わりましたが、戦後はまだまだ大変でした。

私の家では、ご飯の中にサツマイモ、豆かすなどを入れて炊いていました。お米は、農家の人から着物などと交換したりしましたが、おまわりさんに見つかるので没収されてしまいます。

野菜は、母が庭を畑にして、トマト、キュウリなどを作っていました。お米は配給制で、米穀通帳というものがなければ買えません。

それから、進駐したアメリカからは、ソーセージの缶詰、コンビーフ、白いアスパラガスが配給され、これは何とも美味しかったですね。大好きでした。今でも好きです。

また、その頃は衛生状態が悪かったので、ノミ、シラミが、髪の毛から下着まで、体中についてしまいました。退治するのに「DDT」という粉の殺虫剤を頭から容赦なくかけられ、これは、ものすごく苦しくて、嫌でした。

この風景は戦後のニュース映像などでよく紹介されているので、ご覧になったことがあるかもしれません。

戦後の学校は、みんなが疎開から帰ってきたので、1クラス60人以上になり、2人掛けの机に3人並んでいました。教科書は新聞紙のように大きく印刷されたままだったので、それをみんなで切って本に仕上げました。検閲が厳しかったよ

うで、都合の悪いところは黒く塗りました。

さて、これからは、私が70歳を過ぎてから訪れたパラオ、ペリリュー島でのお話をさせていただきます。

私は、60歳で練馬の水泳教室に入り、70歳でスキューバダイビングの資格に挑戦、取得しました。

先ほど、富山の魚津に疎開していた時のことをお話ししましたが、この時よく、海に遊びに行つて、少し泳ぎを覚えました。そのことが水泳に興味を持った理由です。

そんな折、友人に誘われ、夫と私、そして友人2人で行ったのが、パラオでした。風光明媚なパラオの海では、ダイビング、スノーケル、カヌーと、楽しみました。

先に帰る友人が、「残り2日間あるから、ペリリュー島に行ってきたら」と薦めてくれました。

お恥ずかしい話ですが、その時、私は、ペリリュー島とは、どういう島か知りませんでした。ご存知の方はいらっしゃいますか。あまりいらっしゃらないようですね。

ペリリュー島とは、戦争の激戦地だったのです。

カヌーで行くと、海面には飛行機のプロペラが突き出ていたり、潮が引くと、零戦がそのままの姿で沈んでいるのが見えました。本当に驚きました。

戦車や大砲が置きっぱなし、鉄兜、飯盒、遺骨等が散乱していました。戦争の過酷さを目の当たりにして、ショックを受けました。現地住民は、「日本から早く遺骨を収集に来て欲しい」と言っていました。

この島で一緒になった若いカップルは、お神酒とお線香を持ってきていて、お供えしていました。どなたか身内の方がペリリュー島で亡くなられたのかもしれ

ません。この島のことを知らなかった私は、歳をとっているのに本当に恥ずかしく、お若いカップルのことを尊敬しました。胸が締め付けられる思いでした。

ペリリュー島での戦いは、戦後、余り詳しく語られていませんでしたが、日本兵が1万人、米軍は1,700人が戦死しました。日本兵は餓死でした。生き残った人たちは、ねずみや蛇、魚を獲って食べていたそうです。

平成27年4月、パラオ、ペリリュー島に、当時の天皇皇后両陛下が——美智子さまですね——戦没者を慰霊するため訪れ、日本の慰霊碑に献花されました。

やっと、ペリリュー島で戦死した人たちに光が当たり、私は現地を見ているだけに、本当に良かったと思いました。

戦争は、軍人だけでなく、一般の人もどれだけ悲しい目にあったかしれません。私の夫の家も、豊島区椎名町にありましたが、焼夷弾で焼けてしまいました。

平和の大切さ。戦争は恐ろしく、また何と悲惨なことかと、声を大にして次の世代に伝えたいのです。

今日6日は広島に原爆が落とされた日であります。被爆者の方々の中でも、その体験を語れる方がどんどん少なくなっていると聞きました。体験者の証言を受け継いで伝えていく若い世代を養成しているそうです。

私も、8月21日には、小竹図書館の催しで小学生に戦争体験をお話しする会にも参加します。

これからは、そういった若い世代に戦争体験の話を聞いていただけたらと思っています。今日ここにおいでの方で、戦争体験された方は知らない方にどうぞお話をし、知らない方は知っている方に聞いていただけたらと思います。

「戦争は二度と起こしてはならない。」これが私の心からの叫びでございます。本日は、私の拙い話をお聞きいただき、ありがとうございました。

ご清聴ありがとうございました。